
nasieri ~ ナシェリ ~

東田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

nasierinナシエリ

【Nコード】

N6542M

【作者名】

東田

【あらすじ】

誰もが敬う神の使い 祐血者。

しかしその正体は血を喰らい、人を囚う吸血鬼であった。

‘神は自分たちを護ってくれはしない’そう気付いた少女リアは、神を崇めることをやめ、自分よりも見目幼い美しい少年に縋った。

血を喰らう神の使いと血を忘れた彼女の物語。

恋愛ファンタジー、シリアス傾向です。

【第1幕：吸血鬼と神殺し】 01

01

その日、姉は、小麦色の肌を蒼白にして帰ってきた。

？・ 吸血鬼と神殺し

日はまだ沈む途中。小窓から覗く空は赤く染まっていた。

ちようど家事を一通りこなし終わるこの時間。いつもの様に少女はひとり、椅子に座りながらその小窓から外を眺めていた。彼女は十五という歳のわりに小柄で幼い顔立ちであり、窓から吹き込む風に、肩までに切りそろえられた光を含むような金色の髪をなびかしながら、幼い頃よく父親にほめられた自慢の青色のおおきな瞳を瞬かしていた。

その瞳に映すのは、窓の向こうの淡い赤色の世界。その遠い世界に思いをさせていた彼女だが、木製のドアをノックする音が意識を現実へと浮上させた。いつも通りのように馬や豚の世話をしに農場へ行っていた姉が帰ってきたのだらうと、少女は玄関のドアを開け、出迎えた。

「姉さん・・・？どうしたの」

おつかれ、という労う言葉ではなく、思わずそんな言葉をだしていた。ドアの向こうに居た姉はいつもとは違う様子だったのだ。

ドアを開けたにも拘らず姉は中に入ってこようとしない。顔面は幽霊でも見たかのように蒼白で、妹である少女を虚ろな眼差しで見つめている。少女は姉を探るように見つめ返した。

「もしかして、家畜に何かあったの!？」

少女は真っ先に、姉が世話をしに行っていた家畜の心配をした。

彼女たちが暮らすのはビュアという、とても小さな村。ここで暮らす者達はこの非常に小さな村の中のサイクルで生活をしている。

よって貨幣はあまり使われず、物々交換というのがスタンズだ。しかしこの村もちろん国の自治区の一つであり、税を貨幣で支払う必要があった。そのために毎月、森を抜け、30キロほど離れた場所にある城下街に行つてものを売り、貨幣を得る。その売物として、彼女たち一家は家畜が大事な財源であるのだ。

そのため不安に駆られながらそう尋ねたのだが、彼女が咄嗟にした危惧はすぐに取り払われた。

「……家畜たちは、元気よ。心配ないわ リア」

姉はポツリとそのように答えると、視線を少女 リアからそらし、横をすり抜けてさっさと家の中へ入っていった。

リアはドアの前に突っ立ったまま、訝し気な眼で姉の後ろ姿を追う。しかし姉はリアの視線を振り切るようにして家の奥の自分の部屋に入ってしまった。

*

姉の部屋をリアがいくらノックしても返事は無かった。リアはドア越しに、様子のおかしい理由について原因を何度も尋ねもしたが、その日は結局、答えることも夕食も食べることも姉はせずに、早々床についたらしかった。

そして一夜があけたその翌日。姉の異変は元に戻るところが一層増した。

「姉さん、具合悪いの……?!」

目の下に早くに寝たとは思えないほどの隈を作り、今にも倒れそうなほど顔色が悪い。そんな彼女をみた瞬間、深刻に彼女が心配になり、リアは駆け寄った。

「熱は……?」

熱を測ろうと、姉の額へと手をかざす。それと同時に、姉は妹のその手を振り払った。

一言、「触らないで」と付け加えて。

リアは呆然とした。目すら合わせてくれない。いつだって笑顔で優しい姉がそんな拒絶の態度をとったのは初めてだった。

そのまま無視するように離れた姉を目で追いながらもリアはその場に立ち尽くして動けなかった。だが、彼女が食卓のテーブルについたのを見とめると、姉は朝食を摂る気があるのだと読み取り、リアは慌てて朝食の支度をするために台所へと踵をかえた。

「……ねえ、やっぱり体調でも・・・悪いんじゃないの？」

働き者の父はほとんど家に帰ってこないし、母はリアを産んで死んでしまった。だから朝食のこの時、リアは姉と向かい合い、二人きりだ。

朝食のスープを口に運びながら、リアは恐る恐る、再び姉に尋ねた。姉に話しかけるのにこんなにも緊張したのは初めてだった。

「具合が悪いのなら今日は私が農場に行くわ。姉さんは家で休んでいて」

なお答えようとせず、俯いた姉からは表情も読み取れない。リアは不安を振り払うよう早口でそう続けて言った。

その直後、カチャリという金属音がテーブルに伝わった。スプーンが机に落ちた音だろう。リアは反射的に自分の手元を見た。自分はスプーンをにぎりしめている。自分のではない。自動的に姉の手元に目をやった。・・・彼女のもとのテーブルはスープが飛び散り、スプーンが無造作に机上に配置されていた。おそらく姉はスプーンをスプーンの入った皿に落下させ、両者は皿から飛び散ってしまったのだろう。

「よく言っわ！ぬくぬくと今までこの家の中で護られていたくせに、あんたが家畜の世話なんてできるわけないでしょう？！簡単に言わないで頂戴！　あんたはこの家に閉じこもってればいいの

……！」

「え・・・？」

姉が言ってることをリアは直ぐに理解出来なかった。ただ、姉が

そう発言しながら勢いよくテーブルを揺らして席をたつて立ち去ったのと、数秒後に玄関のドアが閉まった音を五官が感じ取った。

リアがその間思っていたことというと、

（あ、スープがこぼれた）

だとか、

（姉さん、食後のお祈りをしないで席を立つたわ）

といった覚束ない思考だった。

姉が自分に暴言を吐いたなんてこと自体、余りに信じられないことだったからかもしれない。

そのか細い四肢のどこからそんなエネルギーが出て来ているのか、と不思議になるくらい活発で、明るく、妹にとてつもなく甘い少女、というのがリアの姉だ。家の仕事を担うことが役目の、陽に全く焼けていない色白のリアと違って、彼女はまさしく日の光を浴びながら生活するに相応しく家畜の世話をする。リアは目を細め、小窓から朝日を見すえた。

（そういえば、今日はバドが来る日だ）

姉の歳は十七でリアの二ツ上。姉にはリアと違ってこの閉鎖的な村らしく、幼い頃から決まった許婚がいた。

（午後になればきっと姉さんの機嫌は良くなるよね）

なぜなら今日は、一週間に一度、姉が夢中である婚約者のバドが家にくる日だからだ。そう考えながらリアは姉がこぼしたスープを片付ける。

そしてその安易な考えは大きな間違いだったと直ぐに知ることになった。

ある人物特有の丁寧な三度のノック音にリアは確信して、即座にドアを開けた。するとやはりそこには思った通りの姉の婚約者の顔があつて、彼女は安堵した。

「やあ、リア。アイリはいるかい」

そう言いながら彼はリアの姉　アイリを見つけようと家の中を見渡した。

「こんにちはバド。ごめんなさい、姉さんはまだ帰ってきてないの」

もう帰つて来る頃のはずなんだけど、とリアは早口で続ける。

「へえ・・・農場へ行つたのかい？」

「ええ。でも姉さん、体調がすぐれない様子だったの」

そう言いながらリアは彼を家の中へ招き入れた。

「姉さんは何も言わずに家を出てしまつて私ひとりしか家に居ない状態だったから、姉さんの様子も見に行けなくて困っていたの。」

……ねえバド。私、様子を見てくるわ。家を守っていてくれる？」

「・・・ほら、やつぱり！二人では不便なんじゃないか。だからあれほど君達に犬をプレゼントすると言つたのに」

「ええ、そうね。私もそう思うわ。でも姉さんと父さんが」

彼女たちがいるこの国の大半の人間はレシクス、ガンレッチ、サアジの三大神を崇めている。

家にはレシクスの使いであるフィラフィアという屋神が住む。孤独を厭う神であるから決して家を誰も居ない状態で空けてはならない。それが習わし。……とはいってもそれほど大変な慣習というわけでもない。用は“世帯主が仲間と認めた生きているもの”さえ家

に在ればいいのだ。だから信仰を行っている人々は必ず何かしらの動物を家の中で飼っている。だから何も飼ってもいないし家族の人数も少ないリアのケースは大変特殊であった。

「アイリとジェフドさんは何を考えているんだ？君を家に閉じ込めるようなマネをして」

「姉さんは父さんに従ってるだけよ。父さんは・・・気難しい方だから。別に私を家に閉じこめたくってそう決めてるわけじゃないと思うわ」

頑なに父のジェフドと姉アイリは、リアの代わりに留守を勤めさせる動物を飼おうとしない。そうあるのは小さい頃からだったからリアは別段理由も気にしてこなかった。しかしリアたちの体制に眉をひそめたバドが、うちの犬の一匹を貰ってはどうかと提案した際、リアの心は躍った。家の留守番役になっていたリアにとってやはりその役は重荷になっていたのだ。まあ結局、ジェフドとアイリの彼の提案の拒否には反抗もせずおとなしく従ったのだが。

「その話は今は置いて。ごめんなさい、私、姉さんを見に行ってくるわ」

「あ　待って！」

引き止められるとは思ってもよらず勢いよく進もうとしたので、彼に右腕を強く掴まれリアの体は前のめりになり、続いて逆に引っ張られた方向に倒れそうになった。

「ああ、ごめん」

慌てて彼はリアの傾いた体を支えた。

「ううん、……なに？」

咄嗟に、ぱつと彼から離れると、リアは彼を見上げ、聞き返した。

「実は二人だけのうちに聞いておきたいんだけど」

「何を？」

リアは訝しげな表情で顔を傾けた。

「君は、・・・僕と結婚してもいいと思うかい」

「…………え？」

リアはバドが何を言ったのか咄嗟に理解できず、間拔けな顔で相手をみつめた。

対して彼はきまりが悪そうというか、どこか切羽詰まったような表情をしていた。

「あのね、リア。…………僕は、君が僕と結婚するのはどうだろうかと考えているんだ」

「……………どういうこと。意味がわからないわ」

バドは姉 アイリの婚約者だ。それは彼らが産まれたときから決まっていた自明なもの。それを無視するような彼の発言はリアにとって本当に意味が不明だ。

「考えてご覧よ。ただでさえ君は家族二人の代わりに家を守らされているだろう。それがアイリまで僕と結婚すれば・・・君はいよいよカゴの鳥だ」

とても深刻そうに彼はポツリポツリそう言う。あまりにもただならいような言い方なのでジョークでないかと思うぐらいだ。

現にリアは笑ってみせた。

「待つてよバド、そんな大袈裟な。姉さんが結婚してこの家を出ていった後はさすがに父さんも犬でも飼うことを承諾するに決まっているわ。…………それに何で結論が、私と貴方が結婚するってことになるのよ」

そう軽く言い切ったリアは、バドの発言はおかしいものであったと彼自身思い直すのを当たり前に待った。しかしバドの様子は期待したものと正反対であり、彼は顔をしかめ、じれったそうに唇を噛んだ。

「君は何も分かっているんだ、リア…………！」

吐き出されたのは叱咤のような内容でいて懇願するかのようなも

のもであつた。

その彼の一言でリアの醸す空気もさすがに重苦しいそれへ変わった。

「分かつてないって、何が……？」

リアは慎重にゆっくりと彼に尋ねた。

彼女が視線をあてた彼の顔は瞬きひとつせず、真剣に見つめ返してくる。

一体姉さんといい、バドといい、どうしてしまったのだろう、とリアは不穏に思った。彼女は外にほとんど出れないから友人など居ないし、知り合いに限っても片手で足りるほど。いうなれば二人はリアの小さな世界の大半をしめるものなのだ。二人が普段と少し異なるだけでリアの世界は大混乱を起こしてしまう。

「リア、これはアイリとジェフドさんが話をしているのを聞いてしまったんだけど」

重い口を彼は恐る恐るといった風に開く。

「姉さんと父さんの話を？」

何故だろうか、思い当たる節なんて全くないのにリアは嫌な予感がした。

バドの話を遮ったリアに彼は頷く。そしてもう一度彼が口を開き、何かを発しようとしたときだった。

ドンドン、と玄関のドアになる。

リアとバド、二人は、はっと静止した。

「リア？あたしよ、開けて頂戴」

いつもの見知った声　姉の声にリアは思わず、いつも通り直ぐ反応してドアを開けに行くことが出来なかった。

*

「どうしたの？二人とも呆然と突っ立ってて」
家に帰ってきたアイリは、昨日と今朝とは打って変わって違い
いや、普段通りの彼女の様子に戻って 柔らかな笑顔でそう言
った。

「・・・何の話をしてたの？」

アイリはリアへ顔を向けた。

違う。

やはりいつもの姉ではない。

そうリアが思い直したのは直感的なものだった。
尋ねた姉は朗らかな顔なのに、どこか冷たく鋭い。自分とバドと
の会話を聞いていたのではないだろうか そう漠然とリアは思っ
た。

「アイリ、リアから君の体調がすぐれないようだと言っていた所
なんだよ。大丈夫かい？」

何も言えず固まってしまうていたリアの代わりにバドが話を繋い
だ。

「ええ、大丈夫。リアは大袈裟なのよ」

「そうか、良かった」

バドが答えると誰も何も発言せずに三人は立ち尽くした。居心地
の悪い空気が流れる。こんなことは本来有り得ない。だれもが黙っ
ていても穏やかな空気が流れていたはずだ。やっぱり今、なにかお
かしい。

おかしいのは姉だろうか。バドだろうか。

リアはつらつらと責任を誰かに押し付けようとする思考をして現実から逃避していると、アイリが再びこちらを向いた。リアは身を固くする。沈黙は優しい声色の姉により、破られた。

「リア、今朝は心配かけてごめんなさいね」

リアはおもいきり首をぶんぶんと振る。

そんなリアをみてアイリは笑った。

その笑顔はいつも妹を甘やかしてくれる、まさしくいつもの姉のそれだ。

そう感じたリアの胸に、今度こそ安堵感が溢れ出した。ようやく身体の筋肉が緩まる。

「そういえば、あたし、夕飯のためのハーブを採ってくるのを忘れてたわ。ねえ、リア。貴方が採ってきてくれないかしら。たまには代わりに外へ出たいでしょう？」

リアはとたんに嬉しくなり笑顔で大きく頷いた。

嬉しかったのはアイリの言うように外へ出れるからだけでない。姉が自分を外へ出るよう促してくれたことで、自分が無理に家へ閉じ込められているとバドが思っているのは間違いなのだと、タイミン
グよく彼に知らしめれたとも思ったからだ。

「じゃあ私採ってくる！」

意味ありげな笑みをバドに向け、身を翻し、リアは玄関のドアを勢いよく開けた。

彼が渋い顔をしていたのは自分の勘違いに気付いたきまりの悪さ

からだと思い、リアは土を踏みながら笑みを深めていた。

勘違いをしていたのは全て自分だったのに。

彼女はこの時、本当に何も知らずに小さな世界で鳴いているカゴの鳥だったのだ。

03

03

ハーブや野菜を育てている畑は、自宅から10分ほど離れた所にある。リアはその畑に直行せずに、ほんのささやかな気まぐれで自宅と畑の中間点にある農場へ立ち寄った。

単に、畑に行つてハーブを採ってくるだけじゃ物足りないと思つたのだ。何せこの外出は、一週間ぶりである。

とはいつても、遊べる場所も知らないし、会いにいく友人もいなかった彼女は、必然的に姉が毎日世話をしに行き、自分も行き馴染んでいた農場へ行くことが浮かんできたのだ。

これが自分の運命をわける選択であつたなど、もちろん知らずに。

*

農場へ入つたと同時、一つおかしいことに気がついた。

「あれ？いない……」

今は正午を過ぎたあたりであり、高く昇つた太陽がさんさんと照っている。

大雨でも降らない限り、朝、家畜に餌を農場内にある小屋の中で与えたら、暗くなるまでは小屋から家畜たちを出しておかなければならないはず。

そう思つたリアだが、直ぐに納得のいく理由を思い付いた。

（姉さん、体調が悪かつたから早々に家畜らを小屋に入れたのかな）

腑に落ちたことでそれ以上何も考えず、当たり前のように家畜が入れられた小屋に向かい、小屋の木製のドアをスライドさせた。も

う相当古いせいだろう、所々腐敗したドアはギーという高い音を鳴らしながら開かれた。

「うわっ!？」

ドアを開け、中に入ろうと足を一步踏み出したと同時にリアは声をあげた。

(何、この臭い……!)

咄嗟に鼻を両手で覆っていた。

農場が、家畜特有の生臭い臭いであることは当然だ。そして鼻をつんざくような今の臭いも生臭いものである。だがそれは、いつもとは違う、農場に相応しくない臭いであった。

何、と一瞬考えた。しかしその臭いはよく知るものに違いなかった。誰でも一度は嗅いだことのある臭い。だが、ここまで強くこの臭いを味わうのは普通有り得ないことだろう。

「血の、臭い」

小屋の中は、暗い。

だから直ぐには目が慣れず、中の様子がわからなかった。

入らない方がいい、と身体は警告を出しているのに、リアはとりつかれたように覚束ない足取りで一步一步踏み出した。

だんだんと、瞳は暗闇に適応して、小屋の中の情景を鮮明に映し出す。

鼓動が加速度をあげて、身体を強く叩くように響いていた。

真っ先にリアを戦慄させたのは視覚だろうか。聴覚だろうか。あるいは嗅覚か。

いや、きつと五感全部だ。異常な情報が一遍に五官から入って来たせいで彼女はパニックに陥った。

赤い、臭い、黒い。

いつもは賑やかな家畜たちが、何の音もたてていない。静寂で耳が痛い。反対にリアの体内では心臓が狂ったかのように鳴り響いている。

汗ばむ手が気持ち悪い。

いや、気持ち悪いのは吐き気をもよおしているからだ。
ちがう、今はそんな事どうでもよい。

・・・目の前、足元に転がる赤黒い塊は何なのか。

「いや……」

まがりなりにもリアはこの農場を持つ父の子だ。弱肉強食、自分たちが生きるため家畜を解体し、食べたり売ったりするのはごく普通のこと。リアはさせてもらえることはなかったし見せてももらえなかったが、父や姉は家畜の解体を行っていたことを知っている。

だが。目の前に広がるそれらは、自然の摂理に通じる解体とは明らかに違つと一目で分かった。そしてこの言葉が自然と浮かんでいた。

惨殺。

足元の塊は切り落とされた、牛の頭部だ。原形を留めていないほどに何重にも切り込みを入れられ、血で赤黒く染まっている。

やむを得なく殺されるに至ったのではないと分かった。この死骸から溢れ出すのは狂気。

呼吸が荒ぐ。リアは冷静に目の前の情景を判断できている自分が信じられなかった。

不快な臭いと情景のせいで込み上げてきた胃液を飲み込み、苦くすっぱい味が口に広がる。リアはくぎづけになっていた『それ』から必死で目をそらしたが、それも無駄だった。どこを見ても視界には家畜たちの血と、屍。生き残っている家畜は見当たらない。すべて、バラバラに刻まれたせいだろう、何十もの肉片が散らばっている。

この小屋じゅう、死臭でまみれてしまっていた。ここに居る限り目に映る狂気から逃れられない。

（早くここからでなくては……！）

これ以上ここにいると、自分までがここに満ちている狂気に狂わされてしまいそうだとリアは思った。

けれども心とは裏腹に、身体が動かない。がくがくと震えている足は、動かせばとたんに崩れ、腰を抜かしてしまいそうだ。

もどかしさに、彼女の瞳から涙が溢れ出す。

ここで泣いても仕方ないのに。自分の無力さを重い知らされると同時にリアは今朝の姉の言葉を思い出した。

『ぬくぬくと今までこの家の中で護られていたくせに！ あん

たはこの家に閉じこもってればいいの』

その通りだ。自分はただ護られてきただけで、自分は何も出来ない。姉たちに頼るしかできないのだ。

そんな考えに打ちのめされたリアは、震える臉をおろし、目を閉じた。瞳にかろうじて収まっていた涙がたやすく零れ、頬を濡らす。すると、残酷な情景がシャットアウトされ、一瞬死臭が涙の匂いに変わったことで、ほんの少し冷静さを取り戻すことができた。

（頼ることしか今は出来なくても。自分が唯一できる『頼ること』までなくしたら、私は本当の役立たずだわ）

ここは森に囲まれた小さな村。もしこの猟奇的惨殺を行った人間

がこの村にまだ潜んでいたなら、皆が危ない。今は自分の無力さに悲観している場合ではない。出来ることをするべきだ。

（行かなきゃ。早く姉さんに知らせなくては）

自分を奮起させ、リアは齒を食いしばった。

がくがくと震えている足に力を精一杯込め、彼女は入り口へと踵をかせそうとした。

が。それは、突如割り込んできた声により、未遂に終わった。

「動くな、シュウケツシヤ囚血者」

低く、小さいが、よくとおる男の声。リアは放たれた言葉の意味を理解する前に、体を硬直させた。

防衛本能とは不思議なもので、あれだけ震えていたリアの体は少しも動くことなく硬直していた。なぜなら、彼女の首もとには見たこともないほど大きい、20センチほどの刃が接していたのだ。左肩を背後の男に掴まれ、右肩の方から伸びているナイフを持った手が彼女の視界に入っていた。

動けば、自分は足元に転がる牛の塊と同じ運命をたどるに違いない。

その塊と目が合い、リアはそう確信した。

「答える。さもなくば、殺す」

ナイフを彼女にあてた男は、迷いない声色でそう脅した。そして呑気なことにも、リアは違和感を覚えた。

目の前の、狂気に満ちる惨殺の情景は彼がこのナイフで作り上げたものなのであろう。しかし、今の問い掛けは余りにも理性的すぎる。まるで、答えたならば殺さずに済むと言っているかのよう。…理性など微塵も感じられない目の前の殺戮とは正反対だ。

そう考えている自分が、さっきまでと打って変わって冷静に目の前のシーンを見ていることに気付き、リアは酷く自分に嫌悪した。臭いも、慣れたのかあるいは麻痺したのか、気にならなくなっていた。

「お前を監囚した祐血者はどうした」

男の鋭い声により、自分がおかれている今の事態にはっと意識を戻した。

死にたくないという本能が、あたかもその質問が救いの糸でもあるかのように、脳内で必死に問いの内容をたぐりよせる。

しかし、質問の意味、………それどころか単語の意味さえ全く理解できない。それは、今自分がパニックに陥ってしまっているせいなのだろうかと彼女は焦った。

（私をカンシユウ、……ユウケツシャ………って何？）

「早く答える！」

（そんなこと言われても、何を答えればいいのか分からない………！）

焦れた男は、リアの首筋にあてたナイフを傾けた。それはとても滑らかな動作だったので、ひやりと鎖骨を伝ったものはてつきり冷や汗だと彼女は一瞬勘違いした。けれど暗闇ながらその赤色は、はつきりと目を引いた。

血だ。

首筋から一筋、血が流れ出ているのだ。

生命の危機に何かがリアの中で爆発した。とたんに、恐怖から出すことも忘れていた声が溢れ出た。

「し、知らない、分からない！………嫌だ、殺さないで！」

その懇願を滑稽に思った男は舌打ちをした。

「囚血者は虚言ばかりだ。耳を貸すこと自体無駄だったか」

独白のように男は小さく呟いた。その声に孕んでいたのは嫌悪ではなく、むしろ憐れみ。

リアは彼の言葉の意味のほとんどを理解できなかったが、自分が嘘をついてると思われるのだということは何となく理解できた。そして、そろそろ男が痺れを切らしているということも。

「待って！嘘じゃない！………あなたの言ってること、意味が分か

らない。何で、私を殺すの……」

息が続かず、最後の方は掠れた声になっていた。それでもこの至近距離にいる男にはかろうじて伝わったようだ。

「これだけのことをしたら、理由には十分だろう」

そう言いながら男は目の前の残劇をナイフで指し示した。そうしながら男は更に続ける。

「ここまで酷い殺し方をした囚血者は初めてだ。・・・殺したものが人でないだけまだマシか？」

（シュウケツシャって何？私のこと……？）

そうだとすると。

血の気が引いた。

リアは大きな勘違いをしていたことに気付く。この目の前の惨殺を行ったのは、どうやらこの男ではないらしい。

（・・・その上、この男は、私がやったのだと思っている！）

「違う、これ、私がやったことじゃない！」

あわてて弁明の言葉を紡ぐも、彼は確信を持って宣った。

「嘘は無駄だ。お前の芳香は、紛れも無く囚血者の匂い」

（におい……！？）

「お前に罪はない。俺を恨め」

罪はないと。そうだ、この知らない男に断罪されるような罪は、自分にはないはず。

・・・それなのにどうして、男はナイフに角度をつけたのか。ま

るで今から自分を斬るかのようではないか。リアは今の状況をそう正確に把握しながらも、当然全く理解することができない。

暗闇ながら鈍く刃が光った気がした。

「やだ、・・・いやあ　！」

自分は殺される。

あまりに理不尽な現実への最後の抵抗として、リアは強く目を閉じた。最後に見たものがあられもない血まみれの自分自身だなんて、彼女はまっぴらごめんだと思った。

「　イゼルア、待て」

ちょうど最後の抵抗、　いや、抵抗にもならぬ気休め　を実行したとき。リアは前方から新たな声がするのを意識の隅で認知した。聞いたことのない高めの、まだあどけなさを残す少年の声。

それは極限の状態にいた彼女にとって、もはやどうでもいい情報であったが、数秒たつても自分の体がどこも痛まないことを把握すると、恐る恐る目を開いた。

目を閉じるまでは誰も居なかった彼女の目の前に、リアと同じ位の背丈の少年が立っていた。

彼は助けなのか。

リアは真っ先にそれを見定めた。しかし味方であっても、目の前の少年はナイフを持った男から自分を救うには華奢すぎる。そんな利己的な考えを彼女は働かしたが、残された頼みの綱は彼しかない。リアは少年へ懇願の眼を向けた。

少年は観察でもするかのようにリアを見つめた。リアへ向けたその瞳は力強いが、少年の顔立ちには少女と見紛う中性的なものであり、

彼の年齢は15歳のリアよりも下と伺える。

「どうした、アズ。死を先延ばしては、この囚血者にとっても酷だろう」

嫌味ではなく、全くの本心からという風に、リアを捕える男は宣った。

その言葉にリアはおののく。緊張でカラカラになっていた瞳に、再び涙が溢れ出てきた。

「嫌だあ……死にたくないよう」

ぐずぐずと嘆きを零す。この情けないありように気分を害したか、はたまた何かに気付いたのか、リアの目の前にいる少年は目を見開き、眉をひそめた。

「イゼルア……この子供は囚血者じゃない」

少年が驚きを含んだ声をあげた。

対してリアは、意味が解らない言葉よりも、およそ年下であろう少年に“この子供”と呼ばれる違和感の方に気を取られた。

「何言って……。この芳香は間違いないだろう、こんなに強く匂いが」

「ああ、強すぎる。この娘の芳香、囚血者よりも断然強い。

彼女は囚血者ではなく……祐血者だ」

自分のことを言われているようだが何を言っているのかリアはさっぱり分からない。ただ二人が何やら揉めだしたことに對し、“もっと揉めてしまえ”と彼女は思った。そうなることで、男が自分のことから気をそらすのを期待したのだ。

しかし彼女の願いは無情にもことごとく叶わないらしい。男は目の前の少年の言葉に口をつぐむと、リアの体を引っ張り、小屋の外へと向かった。あまりに強い力の彼の拘束は振りほどけず、リアは引っ張られながらも慌てて後ろを振り返って少年に助けを求めた。しかしそんな彼女を見ても、少年は冷静な、……あるいは冷淡とい

える顔をしていた。連れていかれるリアを慌てて追いかけるわけもなく、ただゆっくりとこちらへ歩いていただけ。

リアは裏切られた面持ちだった。助けなんかじゃなくて、彼はこの男の単なる仲間だったんだとショックを受けた。

小屋から出された途端、リアは眩しさに目眩がした。彼女は目を細める。すると目の前を歩いていた大きな背中が突如振り返った。あつと息を飲み、恐怖で顔を咄嗟に俯けた。

右手がじんじんと痛い。この男にきつく掴まれているからだ。ちらりと視線を自分の右手にあててリアはそう確認すると、続いて相手の反対の手へ自然と視線を動かした。・・・彼の手には依然として大きなナイフが握られている。

陽の下で見たそれは、さっき見たときよりも一層生々しい鋭さを主張していた。

リアの視線はそこに張り付いたままで、彼のナイフを持った手が動くのを認めるとリアの体はびくりと動じた。

ナイフは、彼の腰元で小さな軌道を描くと、・・・そのまま男の腰へと収まった。

けれども、それに対して安堵する間もなかった。フリーになった彼の右手が直ぐさまリアの顔へとのびてきたのである。

首をしめられると彼女は思った。

ぎゅっと目をつぶると顎にひやりと、冷たい手の感触が伝わった。どうやら首ではなく顎を掴まれたらしい。掴まれた顎は、ぐいと上へ、顔が上を向くように持ち上げられた。

「目を開ける」

有無を言わさぬ声に、思考も働かないまま、ただ彼の言う通りにリアは瞼をあげた。

初めて、男の顔が視界に映る。彼は思ったよりも若かった。20歳ほどの青年。

何より先に目を奪われたのは、初めて見る漆黒色をした髪の毛と瞳だった。

「見ろ、こいつの双眼は青じゃないか。祐血者なら金色のはずだ」

小屋の方に向かって青年はそう発した。すると小屋の暗く陰る入口から先程の少年がゆっくりと姿を現して、彼は青年に答えた。

「それはおかしいな……。確かにその子は祐血者に違いないんだけど」

「間違いないだと。……祐血の血が半分なのか？ いや、祐血者の特徴の金髪、金眼、色白、顔立ちの端正さ、は優性遺伝だったはず」

「ああ、金髪と色白しか当てはまってないね」

余りにも堂々とした失礼さに、リアは呆然とすることしかできなかった。

「けれど、僕が判断を誤るはずないだろ？ イゼルア」

どうやらイゼルアという名であるらしい青年に、少年は自信満々に問い掛けという名の確認をした。

沈黙は肯定。その言葉を自明にするかのように青年は閉口する。

肯定を口にはしようとしていない青年に対して、少年は薄く笑いながら、仕方がないなという風に肩をすくめた。

二十歳程の青年と十五に満たない位の少年。そんな年齢差があるはずの彼らだが、彼らの言動は、年齢差を覆しているかのようである。

「で、一応聞いとくけど。……君は、祐血者だろうか？」

少年の的がリアに移った。

彼は微笑みを作っていたが、それには色濃い警戒がふくまれている。

訳の分からない質問をされる不安定さよりも、自分が警戒される対象にあることの大きな不安定さ。孤独感。

未だ青年に強く掴まれている右手が痛い。

信用も何もまるで無い、言葉の通じぬ獣のように自分は扱われている。そんな生まれて初めての経験にリアはおびえた。

「姉さん、助けて……」

うつむき、ぽつりと、リアが一番こいしい人と呼ぶ。

「姉さん？……君、姉がいるの？」

リアの小さな呟きは当然、単なる独白として消えていくと彼女は思っていた。

ところが予想外なことに、少年は呟きの内容を取りあげて問うてきた。それも、今までとは打って変わり理解のできる普通の質問だ。ゆえにおもわず少年をみてリアは頷いてしまう。すると、少年は光を通さぬ灰色の瞳を丸くさせた。

なにがおかしいの、とリアが尋ねようとしたときだった。少年は驚きの表情を先ほどまでの冷静な顔に戻すと、淡々と青年に向かって指示を仰いだ。

「イゼルア、この子を離してやれ」

走り去る拙い少女をみとめながらイゼルアは、美少女に見まがう隣に立つ少年　アズに不機嫌そうに尋ねた。

「なぜ開放させた」

「あの子の芳香はとても強いから、ちょっと離れたくらいじゃ見失わないよ。それに：姉がいるってさ。果たしてその姉の方も祐血者なのかな」

イゼルアは不機嫌そうに眉間をひそめた。それでも律儀にアズの問いの意味を考えてしまっている。そんな自分にも彼は腹が立った。

「……父か母か、はたまた両方か、あの娘がどう祐血を受け継いでいるかで話は違ってくるが、群れをなしているなら姉の方も祐血者だろう」

捕らえるなら単独でいる時が容易いに違いない。つまりさつきが絶好のチャンスだったのではとイゼルアは煮え切らない思いを抱えた。しかし

「本当に姉がいるのかどうかも怪しいものだ」

あの娘はわからない。祐血者のくせにあまりにみたまんまの拙いがキだ。あの隙だらけのあり様は、逆にこちらが隙をみせるための演技なのか。あれが演技だとしたら、やはりあなどれないとイゼルアは思う。

「囚血者はともかく、祐血者は嘘はつかないよ」

アズは微笑みながらそう静かに、けれど力強く反論した。それに対して閉口したイゼルアを尻目にさらに話を続けた。

「ねえ、あの子の姉のほうか、もし祐血の血を受け継いでなかったとしたら？」

イゼルアはさらに眉間の皺を深めただけで、何も答えなかった。
「・・・そうだったら面白いのにな」

そのアズの言葉に、悪趣味だ、とポツリとイゼルアはこぼした。
それがアズに届いたのか届かなかったのかは判らないが、アズは笑みを深めながらイゼルアに告げる。

「さあ、そろそろ行くのか。吸血鬼一家に会いにゆこう」

リアは休むことなく家まで走り続けた。運動不足の、ちょっと走っただけで悲鳴をあげる体なんか気にも留めなかった。そして自分の住む家が見えてくると、安堵で視界がぼやけた。彼女はノックもせずに、自宅のドアを開けた。

「姉さん・・・！」

ぜいぜいと荒ぐ呼吸も落ち着かせぬまま彼女は叫ぶように呼びかけた。

「リア。どうしたのそんなに慌てて」

姉はキッチンに立っていた。リアに背を向けたまま包丁を動かしている。トントン、という包丁の音、かぐわしいスープの匂い。それら全てリアをじれったくさせた。

「姉さん、それどころじゃないのよ。家畜が殺されて、変な奴らが、村が危ないかもしれない……！」

妹の切羽詰まった声にもアイリは黙って背を向けたまま。

「ねえ、姉さんてば！」

じれったさに耐えられなくなったリアは勢いあまって思わず目の

前のテーブルを両手で叩いていた。

カシャンと音がした。叩いたせいでテーブルにのっていたティーカップが音をたてて揺れたのだ。

ふと、リアは思い出す。

「……バドは！？ねえ、まさかうちをでてったんじゃない。今危ないのに……！」

そのティーカップは、特別なものだった。姉は、いとしい婚約者のバドが来た時のみ、うちにある食器の中で唯一洒落たそのティーカップを出す。ピンクと青の二種類のティーカップ。アイリとバド専用。

ピンクと青。……テーブルにのっているのはピンクのティーカップだけだった。

無意識に青を探す。よく見ると、テーブルには紅茶だろうか、透明な液体がこぼれていた。自分がテーブルを叩いた際にこぼしてしまったのだろうか。とリアは一瞬考える。いや、違う。

テーブルから液体は滴り、床に小さな水溜りをつくっていた。その床には、青色の粉々の陶器が散らばっていた。

そしてその周りには。

リアは息をのんだ。

「リア。大丈夫よ。バドは帰ったわ」

息をとめたまま視線を上に向かすと、アイリがこちらを振り返っていた。

「姉、さん……」

「バドもきつと無事よ。リア、久しぶりに外に出て疲れたのね。……ううん、きつと悪い夢を、白昼夢を見たのね。やっぱりそれは恐ろしいでしょうリア？ここが一番、か弱い貴方には相応しいの。」

アイリはゆっくりとリアの元へ近づいてゆく。
とらわれたように、リアは姉の瞳から目が離せず、動けなかった。

「だから、外でのことはすべて忘れなさい。ずっとここにいればいいのよ。ここは安全だから」

リアは脳内が麻痺していくような気がした。姉の言葉は、甘く、魅力的で、正しいものに違いないように思えた。

すべてがどうでもいい。外で起こったことも、バドの行方も、

割れたバドのティーカップの周りに数箇所点在している、赤い血の訳も。

アイリがリアを抱きしめようと両手を開いた。

リアは姉の抱擁を目を閉じて待った。

……ところが、姉の体温を覚える前に、左腕に後ろへと引力をおぼえた。その刹那、姉とは反対方向へと身を引かれた。

「馬鹿かお前は……！何故！」

彼女を後ろへと引いた人物は吐き捨てるように言葉をリアへ浴びせた。

「囚血者の暗術にかかる祐血者があるか！」

罵倒を浴びせる主、斜め後ろをリアは振り返った。

ぼうつとする頭が覚醒し、リアは声をあげた。

「あなた、さっきの」

漆黒の青年イゼルアは舌打ちしながらリアを更に後ろへと突き飛ばした。

「っ」

強く突き飛ばされたせいで彼女は壁に背中を強打し、そこに倒れ込んだ。

リアは痛みに顔をしかめながら、自分の傍に近付いてくる一組の脚をみとめた。そして彼女の体に影ができる。

「君みたいに力のない無力な祐血者は初めてみたよ」

顔をあげて脚から相手の体、顔をリアは見上げる。やっぱりさっきの二人組のうちの少年の方だった。その少年の表情は感慨なさ気だ。リアは唇をかんだ。痛みからではない。悔しかったからだ。

（なによ。こんな子供に言われたくない。自分と同じ位小さな体の子に）

リアは少年　アズをきつと睨んだが、彼は気にも留めず踵を返し、イゼルアとアイリの方へ近付いた。

サアッと意識が浮上したリアは、姉に向かって叫ぶ。

「姉さん逃げて！この人たちは危険よ！」

「……危険なのはこの女の方だろう」

イゼルアがそう言いながらナイフでアイリを指し示し、言葉を続けた。

「アズ、今度こそこの女で間違いないな」

アズはこくりと頷いた。それを合図としてイゼルアはナイフを構える。

対して姉は虚ろな眼差しで慌てる事なく対峙していた。

「……やめて！姉さんに何する気！？」

「分かってないようだから教えてあげるけどね、あの家畜を無惨に殺したのは彼女　君のお姉さんだったんだよ」

アズがこちらを振り向いて何ともないように告げた。

「僕たちは囚血の強い芳香に誘い出され、君があゝの農場に来る少し前にたどり着いていてね。……最初は君が囚血者かと勘違いしたんだけど。まさか、君の姉が囚血者だったなんて、これは僕らも予想外だった」

たんとされる説明。しかしリアは理解できない。

「姉さんが、家畜を？……まさか」

あの狂気にまみれた恐ろしい光景が蘇った。愛する姉とあの狂気がイコールで結べるはずもなく、……しかしリアは震えていた。

「その血痕。ここでまた何か殺めたか。……今度は、とうとう人か？」

イゼルアはテーブルの下に数箇所こびりついている血を睨んだ。

「ええ、そうよ。裏切り者に断罪を」

今まで沈黙していたアイリが口を開いた。言葉はイゼルアの質問をたしかに肯定するもので、彼女はわらっていた。

「うそでしょう……？」

姉を凝視したリアに姉は目を合わせ、冷たい表情をみせた。

「バドは馬鹿よねえ。こんな役立たずの味方をして。……だから殺したわ」

震えがとまらない リアは自分の身体を抱きしめていた。そうして床にへたりこんでいる彼女にアズは近付くと、目線を合わせるようにしてしゃがみ込んだ。

「残念だけど、彼女はもう君の知っているお姉さんじゃないんだよ。祐血者に監囚されてしまっている。君の様子では、君ではない祐血者にやられたんだろう。……彼女はもう既に」

（もう既に……なに？）

呆然とアズの話の聞きながら、リアの焦点は彼の後ろにあった。

胸から血しぶきをあげて倒れていく姉の姿が映っていた。

あっけなかった。

いま一番恐ろしいものは、姉が殺されたことでもなく、姉を殺したイゼルアでもなく、何もせずに姉の死を見届けている自分だとりアは思った。

「もう既に、人間ではないんだよ」

ドサリと音が切なく響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6542m/>

nasieri ~ ナシェリ ~

2010年10月10日06時41分発行